

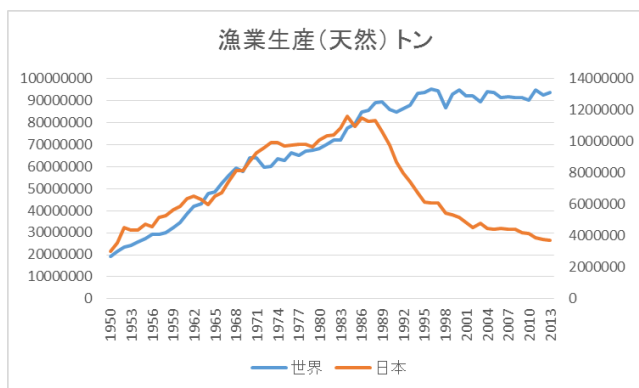
山里川海の一体保全に寄与することを目的に、一般社団法人グリーンバナー推進協会は大自然のなかや一次産業の現場で調査や保全活動を続けております。その現場から、特に気になるトレンドや現象を連続レポートでリアルにお伝えしたいと思います。第12回目は持続可能な漁業をテーマに現場の姿と声をお届けします。



この10年で魚資源の課題は世界共通のものに

地球規模で魚への依存が高まり 持続的な漁業が世界的テーマに

地球規模でいえば、人口は爆発的に増え続けており、食料確保の観点から魚への依存度も年々高まっています。一方で、国際機関の報告書によると、捕獲された魚の35%は廃棄されており、3分の1は乱獲されています。廃棄は冷蔵状態の悪さが大きく影響していることと、捕獲した小さい魚を捨てていることも要因です。



また、養殖の生産量も昨年は過去最高を記録して

ます。養殖が増えれば漁獲量が減るかといえばそうでもなく、養殖の餌に天然魚が使われるため逆に漁獲量が増えることもあるのだといいます。

上表の通り、日本の消費量は減り続け、世界の消費量は増え続けています。こうした背景のなかで、持続可能な漁業への関心が世界的に高まってきています。

魚を取り巻く国際環境の急変での中漁協の課題も複雑化

日本でも全国各地の漁業協同組合で魚資源の保全のために、様々な活動が行われています。

下記の表は和歌山県東漁業協同組合による採捕する魚介類のサイズ規制と採捕禁止期間です。また、下の写真は同漁協のある串本港で行われた海中清掃ボランティアの活動風景です。

中国やASEAN諸国での魚消費量が急増したことで、本州最南端の串本で捕獲できるカツオなどの回遊魚の数は大幅に減少しています。海の資源をどう保全するのか、魚の価値をどう高めて地域経済に役立てるのか、日本の漁業は重要なターニングポイントを迎えています。



種類	禁止期間	禁止サイズ
イセエビ	5/1～9/15	体長15cm以下
ブリ	-	全長15cm以下
アワビ	9/1～2月末	殻長10cm以下
トコブシ	9/1～2月末	殻長4.5cm以下

水素燃料電池車搭載船の実証実験が大阪市で実施

大阪市天満橋の船着場で、大阪市立大学とベンチャー企業によるユニークな実験が行われました。

水素カーをそのまま船に積み込んで動力源に使うことで水素船を実現するという試みです。漁港に水素ステーションを開設するのはコスト的に難しいことを想定して、街中の水素ステーションで燃料をチャージした水素カーでそのまま船に乗り込み、燃料電池と船外機をつないで船を動かすことにしました。1回の水素燃料チャージで13時間（時速kmの場合）の運行が可能といいます。今回の成功を受けて、次はより大きな船を動かす実験に取り組む予定とのことでした。



漁港から離れた水素ステーションで燃料チャージ



産官学民連携による持続可能な海社会の構築（令和元年度 内閣府SDGs未来都市選定事業）

和歌山市加太では1年前に東京大学生産技術研究所の国内初の分室が開設されて以降、サステナブルな漁業とサステナブルなまちづくりを並行して推進してきましたが、今年度は政府のSDGs未来都市の認定を受けて産官学民連携で事業を本格化させます。伝統的な漁業を核に経済と社会と環境をつないで街を再生し自然を豊かにする施策は多くの漁村のモデル事例になるはずです。

